

第57代ダービージョッキー

# 中野栄治騎手

ぼくは泣かなかつた

優駿

シヨツキーコトピツクス

文

木村幸治

フォト・米山邦雄

増沢さんの馬(ストロンククラウン)がサッと先に出て、その後ろから追っかける競馬になる。中野実治は予測していた。平成二年五月二十七日、第五十七回日本ダービーは好天にして良馬場。デビューして十九年目、八回日の日本ダービー挑戦になる騎手は「絶対オレが勝つ」と信じていた。

泉月賞はスタート直後によれるアクションデントで、ハクタイセイの二着に甘んじた。へあのときだって、オレが勝ってなけりやおかしかったんだ。

中野は騎手生活十八年てつちかって来た勤で、自分が加藤修甫調教師にまかされた馬の能力を、心底から信じ切っていた。

「負けるはずがない」

アイネスフウジンのパワーが、武豊の乗るハクタイセイよりも、横山典弘の乗るメジロライアンよりも勝っていることに確信を抱いていた。

泉月賞でハクタイセイに惜敗したとき、加藤調教師は言ってくれた。「気にするな、負けたとき次に勝つための因をつくらなきゃならんから」

年二十八歳、調教師の方が上だが、ジョッキートレーナーとしてデビューした歳月では同期生である加藤のことは、嬉しくもあり、中野の心に棲みついていた。

ダービーが近づき、中野の心を迷わせてするようにスポーツマスコミは、人気のヤングジョッキーが騎乗する二頭の馬の「実力」を持ち上げつづけた。とりわけメジロライアンに肩入れする新聞・テレビ・雑誌が目立った。

「武、横山の人気でウマも人気になってる。ボクが目では三頭互角だと見えた。しかしキヤリアの差で勝つのはオレだと信じて疑わなかったんです」

整った顔立ちに少年のようなあどけなさをも浮かびあがらせながら、中野が苦



K. Itoyama

「オジサン族だって、また捨てたもんじやねえんだぞってことを、勝つことで示したかったんですよ、きつと」

プレッシャー(心理的抑圧)には強い方だと思っている。一番人気のウマに乗って一着でゴールする。それが理想だ。

「借金かき集めて重賞買ってこても、一番人気になりたい」

出演したテレビでジョークを飛ばしたことがある。馬券は買えないのでジョークだが、本音である。

十九万六千五百人という、日本スポーツ史で最高の観客が集まることなど予想もしないレース前夜、中野はぐっすり寝た。午後十時に眠りにつき、翌朝第一レースの騎乗があったので早く起床しよう

と決めていた。四十分後すこした。翌朝の第一レース(四歳・未勝利)はナイスパーワーで二着。そのあとダービー本番まで騎乗はなかった。

ヘケツからでもない。とにかく泉月賞のようなスタートミスだけはほしまい」

ハナに行かなくても、何番手で進んで

も、馬にエネルギーをささげなければ勝てるんだ。中野は自分に言い聞かせて長い時間を待った。

三時四十分。ゲートが開いて二十二頭の馬群がターフを蹴った。中野は二十二頭のスタートが、ぜんぶ視界でとらえられたと言った。

☆ ☆



「攻めのレースに出たのは武豊だった。中野がつぶやく。驚いたのはハクタイセイでした。二完歩いたところまでスッと馬身前に出てた」

あ、早いなと感じた。でも自分が前へ行けば武が控えると思ってアイネスを行かせた。ラクにハナに立てた。

レース前から府中のターフ二千四百メートルのどこを走るかを、中野は決めていた。内角から五、六メートル外。芝生の傷みがいちばん進んでない場所だ。

先頭に立ったから、その走路を行けた。スローテンポで逃げると、追いこみ馬に余力を与えてしまう。ハロン12秒の前半で速めのペースで逃げた。

中野は12・8秒、10・9秒、12・0秒、12・0秒、12・1秒と1ハロンずつを刻み、じつに前半の千メートルを59秒8の速いラップで逃げた。

菅原泰夫のサハリンベレーと武のハクタイセイが五馬身差くらいで追ってくる。「五馬身差の間隔で三コーナリーの坂に入ろうと思ってた。インコースは空けたい。そしたら(期待どおり)ハクタイセイが内に来た」

師が、私にささやいた。「全体の流れがあんなにきれいになったダービー、今まで見たことがない……」

ウイニング・ランをつづけた馬とジョッキーは、向正面のコースでしばらく立ち止まったままだった。やがてダクで帰って来て観客たちから「ナカノ、ナカノ」のスタンディング・オベーションが巻き起こった。

「お前、向こうで泣いてたんだらう。だからスタンド前に帰ってこれなかったんだらう」

と多くの知人にあとて中野はからかわれた。しかし中野は泣いていたのではありません。鞍上から降りてあげなければ転ぶのではと中野に思えたほど、全力を使い果たして勝利をもち取ったウマはヨレヨレに疲れていたのだから。日本ダービーの覇者の、よろけ走り、をファンに見せたくなかったから、騎手はときを稼いでいたのだから。

スタンド前でファンの喝采に応えながら、中野は顔の汗をぬぐった。これを見たスポーツ紙は翌朝かいた。

「栄治、男泣き」(37歳、男泣き)「万年くすぶり青年」と言われつづけた遅咲き男は、ひょうきんな表情で笑った。

「あれはワザとやっただけです。あの方が見てるんじゃないかと思っ」

レースで他の二十一頭(うちダイイチオイシは途中で中止)の騎手をまんまと騙してのけた中野は、全国の競馬ファンをもケムに巻いてのけたのだ。幸せな詐欺師メー。

けれどこの男のために、本当の涙でとめどもなく頬をぬらした人はいた。昭和五十年に結婚し、夫との間に静香(中三)、舞(小五)、安奈(小五)、翔(四歳)の子をもうけて家を守りつづけて来た中野香織(三十八歳)だった。

競馬漫画を描いている友人がばやいた



三コーナリーからの2ハロンを、中野は11・8秒、11・8秒のスピードで逃げた。ハクタイセイも同じ速さで追ってきた。中野がレースを振り返る。

「ハクタイセイが来た三コーナリーの入口は芝生がはげけてデコボコ道なんてすよ。あそこを通ったウマはスピード競馬で必ずばてます。あの時点でハクタイセイは来ないと思った」

三コーナリーを曲がり切って、中野は初

めてアイネスをインに入れた。四コーナリー手前でハクタイセイと菅原洋行のカムイフジが追って来た。

「あれが良かったんですよ。あそこで三頭が馬群から離れたので、メジロライアンが早く仕掛けてくれた」

中野は冷静だった。直線の上り四百メートルをさがり切るまでは(他の馬に)並ばれてもいいと計算していた。のこり二百メートルほどの馬だつてアップアップ

のはずだ。そこで初めて引き離しにかかる。あとがもつからないか、アイネスに賭けて必死に追ってみよう。計算は当たった。アイネスフウジンはラスト3ハロンを36秒6で走り切った。

外から追った横山のメジロライアンを一馬身四分の一引き離し、2分25秒3。ダービーレコードの初制覇だった。そばにいた往年の名騎手野平祐一調教

のを耳にしたことがある。  
「中野栄治の顔って描きにくいよね」  
「顔があまり過ぎて、誇張できる欠点とか特徴がないからだろ？」  
「その通り」

似せ絵を描くとき、その相手の顔がもつ部分のユーモラスな特徴をオーバーに描けばよく似る。一般常識である。たとえば岡部幸雄なら糸のような目にはかんだ唇、柴田政人なら八時二十分型に垂れ下がった太いマユとオチヨボ口。武豊は一重まぶたの垂れ目に細い首、そして額になびく柔らかい髪……

中野栄治の場合、どのパーツもよく出来すぎていて、彼の個性をキャッチできにくいのは分かる。

しかし、先に「万年くすぶり青年」と書いたように、ダービージョッキーになるまでの中野栄治は、漫画に描かれるような目立つ人気騎手ではなかった。

生まれは昭和二十八年三月三十一日（牡羊座・O型）、大分県中津市。父親中野要が各地を転々としたあと、調教師兼乗り役として大井競馬場に落ちついたため、東京育ち。

品川区にある鈴ヶ森中学を終えたあと、昭和四十四年に馬事公苑に入校、四十六年の春騎手としてデビューしている。

地味な仕事人である。デビュー以来十九年と一カ月の間に、通算勝利数は三百四十三勝（本年度は九勝）。昨年までは年間平均十七・六勝のジョッキーだった。だが、中野の友人藤澤和雄（調教師）が言う次のような評価もあった。

「欧州競馬かぶれみたいなきれいなフォームで乗っててね。ボクが昭和五十二年に厩舎社会に飛びこんだとき、あ、日本にもこんなオシャレな競馬をする騎手がいたのかと思いましたね。岡部や柴田にひびきする成績がのこせてもいいのになと思っってます」

今回のダービーに勝ったとき野平祐二クラな乗り役に勝たしてくれた馬に、既務員の佐川さんに、調教師に、それにボクを見放さないで応援してくれたファンに感謝しています。そんな人たちの顔を思い浮かべて、ああ勝ててよかったなと正直思います



K. Ishiyama

調教師は中野に直接苦言を吐いていて。「お前さん、何年間もなまけてこれまでにいったい何をしていたんだい？」

勝利数は並の騎手だが、アイネスフウジンと出会うまでに重賞で十三勝あげている。仲間うちからは、冠婚葬祭、ジョッキのあだ名をもらっている。

昭和五十九年、父親中野要が死んだときシンポリヨークで東京新聞杯（GIII）重賞九勝目、六十一年に待望の息子翔君が生まれたときには、ビンゴチムールで目黒記念（GII）を手中にしている。

重賞に強いのはともかく、なぜ周囲の期待を浴びながら中野栄治は一流と「流の」間をさまつてきたのだろうか。そんな疑問が生まれても不思議ではないはずだ。「線の細さ」「気の弱さ」を指摘する人がいる。

ダービー前後のエピソードはすべてに書いたが、香織夫人は、強い性格で「結婚以來ほとんど変化がない」「家族思いで、とりわけ子供より私を大事にしてくれる人」とも言った。早く言えば、マイホームを

大切にする理想的な平均点以上のパパと

いうことか。私から見ると、中野栄治には勝負者が持つ意固地なほどのエゴイズム、凶暴性を秘めた自己破壊衝動、顕示欲がない。一見サラリーマン風のおっとりしたマイホーム・パパの印象がほの見える。

だれしも並はずれて超個人的な人間である必要はない。したがって「もう少しその気になれば、一流になれるの」という周囲の中野栄治評は、彼にとっては他人の余計な買いかぶりに映るのだろうか。

中野が笑いながら言った。「死んだ親父が、ボクにいろんな遊びを教えてくれる人で、しかも女性関係などでもハチャメチャな男だったんですよ。そんな父を尊敬はしています。でも家庭生活の上では、父はボクにとって反面教師だな」

上に二人の姉がいる三人姉弟の末っ子に育ったせいか、中野はおっとりとした好人物に見える。四、五年前、中野は騎手という職業にいや気がさし、転職を考えた時期がある。

夫が郷原洋行が、柴田政人が、岡部幸雄が、菅原泰夫が手をさしのべてくれた。「よかったな栄治、本当によかったな」中野には先輩たちがみな「本当によかった」ということを例外なく言ってくれたことが嬉しかった。気がつくとそのそばに武豊と横

「気のゆるみというか、馬に乗っても気が湧いてこない。ゲート出ですぐ落馬したレースが二回ありました。ぶっつんと緊張の糸が切れたって感じ」  
他の一流騎手に比べて自分の能力を考える性格ではない。ただ騎手という仕事にたまたま不慣れになった。折もおり、バスと接触事故を起こし、精神が落ちこみ、不節制がたたって体重が六十キロにも太った。

ある日のことだった。  
「やる気ないんじゃない？」  
香織夫人がついに声をかけた。

「うん……そうだ」  
「あなたが騎手やめるのなら、いつやめてもいいと私思ってるワ。でもそんなダラダラした状態でやめたら悔いがのこらない？ ラクそうに見える他の仕事についても成功しないんじゃない？ どうせやめるなら納得のいくカタチを出してからやめたら？ そしたら、私も反対しないわ」

いま振り返れば、中野はその時の自分がスランプのどん底にいたと思う。チャランポランだったと思う。しかし夫人のあの言葉が、ぐうたらな気力の状態にいた自分を救ってくれたのだ。

へよし、もう一度、若いころの初心に戻ってやってみよう  
年間十三勝、十勝、九勝と落ちこむばかりだった中野が、その九勝しかできなかった平成元年に出会ったのが、三歳馬のアイネスフウジンである。

中野は朝日杯三歳ステークスをアイネスで獲った。十四個目の重賞勝利は初めてのG1レースだった。彼にやる気がよみがえった。

日本ダービーの勝利は、香織夫人の祈りの反映でもあり、アイネスフウジンを育ててくれた生産者、馬主、既務員、調教師の祈りの反映でもあった。

「涙はまだ出ません一回も。でも、ボン山典弘がいた。二人には中野の方から声をかけた。  
「ユタカ、ファンが応援してるからな、頑張ってくれよ」  
「ハイッ。おめでとうございました」  
数日後、私は美浦トレセンに中野栄治



を訪ねた。たまたま野平祐二調教師と話をしている光景とぶつかった。

「なあ栄治、あなたも一流の騎手なんだから、どこかの新聞が面白半分は勝手に書いたんだろうけれど、過去には大変苦勞しましたなんてあれほど書かれちゃいけないよ。過去は過去、あなたには、まだ大きな未来がある」

「ハイ」

私はしかし、野平祐二のことを耳にしながら思った。かつて野平は、ミスター競馬と呼ばれた天才ジョッキーだった。天才と呼ばれたから、孤独でもあったろう。天才なりの努力もしただろう。けれども中野栄治が野平ほどの天性に恵まれず、迷い迷い今日まで歩いてきた平凡なジョッキーだとしたら……。野平には、凡庸な人間のがさがが、努力の質が理解できるのかしらと。

だが野平はあえてそう言うことで、迷いの多かった中野栄治の騎手人生のこれ



からが、もう一つ上のレベルで展開されつづけるよう祈ったのかもしれない。

人には出会いの運があり、大きな転機と出会って飛躍する人がいる。昭和五十年にテスコガビーで桜花賞・オークス、カブラヤオーで弥生賞・皐月賞・NHK杯・ダービーを獲った菅原泰夫は、そのモデルケースだ。

中野栄治にはいまアイネスフウジンとの出会いがあり、人生の飛躍の大きな契機と出会っている観がある。

その中野に訊いた。

「鞍上で、あなたはよく後ろを大きく振り向く。ダービーでも小さくやっただけで、あれは？」

中野が頭をかいて照れた。

「癖なんです。人間の頭ってかなり重いから、馬にはバランスが崩れて不利なんでしょうけど」

言い訳めいた言葉で夫を夫人がかばった。

「ウチの主人、よそ様よりクビが異常に長いから目立つんです。振り向きは多くの騎手がやっています、だけど短いから(笑)」

ノロケに聞こえた。中野が笑った。

「増沢さんもよくやるんです。増さんハナ切って四コーナーで振り向いたら絶対村勝つ。三コーナーで振り返ったら負ける(笑)。ポクたちの間では伝説になっています」

しかし、最後に言い切った。

「よくないとは前から何度も注意されてた。これからはやめてみせます」

さてさて、秋競馬に入ってからの中野栄治のクビと、アイネスフウジンの走りから、目が離せなくなりそうだ。

(本文中敬称略)